

【p22～p25】 ゆめをもって —沖中重雄—

1 資料活用にあたって

- 「夢」がテーマの資料であるが、低学年の内容項目A(5)では、夢に向かってがんばる気持ちを育て、がんばることができた自分に気付くことができるようにすることが大切である。
- 1年生で実施する場合は難しい言葉もあるので、教師が適宜解説をしながら、話を理解させる。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：ぼく（子どもが「ぼく」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：おぼさんの沖中重雄の話
- 変化するところは：「がんばることか。」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『沖中重雄先生の 夢 —医の道に学ぶ』 沖中重雄先生顕彰会編（非売品）
 - ・ 「私の履歴書」（日本経済新聞社に昭和46年7月13日～8月10日連載）
- 沖中重雄について
- ・ 沖中重雄は、陸軍軍人である父太田米丸の厳格なしつけのもとに育ち、親同士の話し合いがあって、父のいとこ姫路の医者沖中盤根の養子となり、その娘と結婚し、沖中姓となった。
 - ・ 1928年東京帝国大学医学部を卒業した後、内科医局に入り、呉建教授に師事した。^{*1}自律神経系の研究を行い、内科学の専門分科を主張して神経内科を確立した。
 - ・ 1946年、戦後に新設された第三内科の初代教授となり、その隆盛の基を築いた。東京大学での最終講義で、剖検（死後の病理解剖）によって確かめられた教授在任中の誤診率が14.2%であったと発表して話題を呼んだ。^{*2}その後、虎ノ門病院院長、沖中記念成人病研究所理事長を歴任し、自律神経系の実験的・臨床的研究を行い、神経病学の確立に努めた。
 - ・ 1963～68年内廷医事参与（宮内庁）として天皇ご一家の健康に奉仕（昭和天皇の主治医）
 - ・ 谷崎潤一郎、吉川英治、川端康成、江戸川乱歩各氏の主治医も努め、時の石橋湛山内閣総理大臣は診察の結果、沖中の助言により、勇退したと言われている。
 - ^{*1}：呉教授は自律神経系の研究で国際的な仕事をした学者である。呉先生は分厚いドイツ語の本を手渡し「明日の朝までに翻訳して抄録してこい」と、沖中を学者として徹底的に鍛えた。
 - ^{*2}：一般の人々は、沖中にしてその程度の診断率かと驚いた人が多かったが、医師たちの反応は、その逆で、その成績を発表された学問的姿勢の真摯さに驚き、賞賛したと言われている。
- 沖中重雄顕彰碑について
- ・ 姫路市東山の大歳神社境内に2000年に建立された。
 - ・ 顕彰碑に刻まれた文字「夢」の大書は、沖中が最も好んだ言葉であり、「医学の進歩」に尽くし、「医の倫理」を身を持って示した熱き想いがこめられている。
- 沖中重雄の言葉
- ・ 「私は夢という字が好きである。どんな環境におかれても、一生、何か夢を持ちながら生きていくことが、その日その日を有意義に送る糧であると信ずるからである。」
 - ・ 「与えられた環境が私に適していたことと同時に、一方ではその中で、まじめに精いっぱい努力を重ねてきた。これが、私の進むべき道だと心に決めて手綱をゆるめることは全くなかったと言っていい。苦しみに耐え、勝ち抜くがんばりの精神が、私のささえであり、唯一のとりえでもある。」

4 展開の具体例

ゆめをもって —沖中重雄—

- ・ **主 題 名** ・ ゆめにむかって A (5)
- ・ **資料の概要** ・ 町たんけんに行ったぼくは、地域のおばさんから「夢」とかかれた石碑のことを教えてもらう。大好きなサッカー選手になりたいと思っているが、自信がなく下を向く。「夢」の字を書いた沖中先生が医学の進歩のために一生懸命努力したことを聞いたぼくは、努力することが夢に近づく第一歩だと気づき、自分も頑張ろうと空を見上げる。
- ・ **ね ら い** ・ 地域のおばさんから沖中先生の話聞いて道徳的に変化するぼくを通して、夢を持ち積極的に努力していこうとする道徳的実践意欲を育てる。
- ・ **展開の具体例**

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・ 学習する道徳的価値に興味を持つ。	あなたの好きなことは何ですか。
展 開	・ 資料の範読を聞きながら黙読をする。	
	・ おばさんから「ゆめ」という言葉を聞いた時の主人公の気持ちを考える。	おばさんから「ゆめ」と読むことを教えてもらったぼくは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・ ぼくの夢は、サッカー選手になることだ。 ・ この字は誰が書いたのかな。
	・ サッカーがうまくできない自分を思い出し、下を向く主人公の気持ちを考える。	下をむいてしまったぼくは、どんなことを考えているのでしょうか。 ・ サッカーは好きだけど、上手くないもんなあ。 ・ ドリブルやシュートが下手だもんなあ。 ・ 好きなだけじゃあだめなのかなあ。
	・ おばさんの話を聞いた時の主人公の気持ちを考える。	「がんばることか。」と言いながら、ぼくは、どんなことを考えているのでしょうか。 ・ りっばなお医者さんでも、うまくいかないことがあったんだなあ。 ・ 毎日ががんばることが大事なんだなあ。 ・ がんばることが夢につながっているんだなあ。
	・ 空を見上げて、虹を見ている主人公の気持ちを考える。	空を見上げて、きれいな虹を見ながら、ぼくはどんなことを考えているのでしょうか。 ・ さあ、今からいっぱい練習するぞ。 ・ 大好きなサッカーをがんばっていこう。 ・ ぼくの夢は、まだ始まったばかりだぞ。 ・ 夢にむかってがんばるぞ。
終 末	・ 資料（堀江謙一さんのメッセージ）の範読を聞きながら黙読をする。	副読本のP26～P27を読みましょう。

夢という言葉聞いて、自分の好きなことを思い浮かべている主人公の心に共感させる。

主人公が夢の実現からは遠い自分の姿を嘆き、くじけず努力しようとする意識が低くなっていることに気付かせる。

おばさんの話がきっかけとなり、前向きに努力しようという意識が主人公に起こっていることをおさえる。

前向きに努力しようという意識が高まり、主人公が「夢に向かってがんばって練習しよう」という実践意欲を強めていることをおさえる。